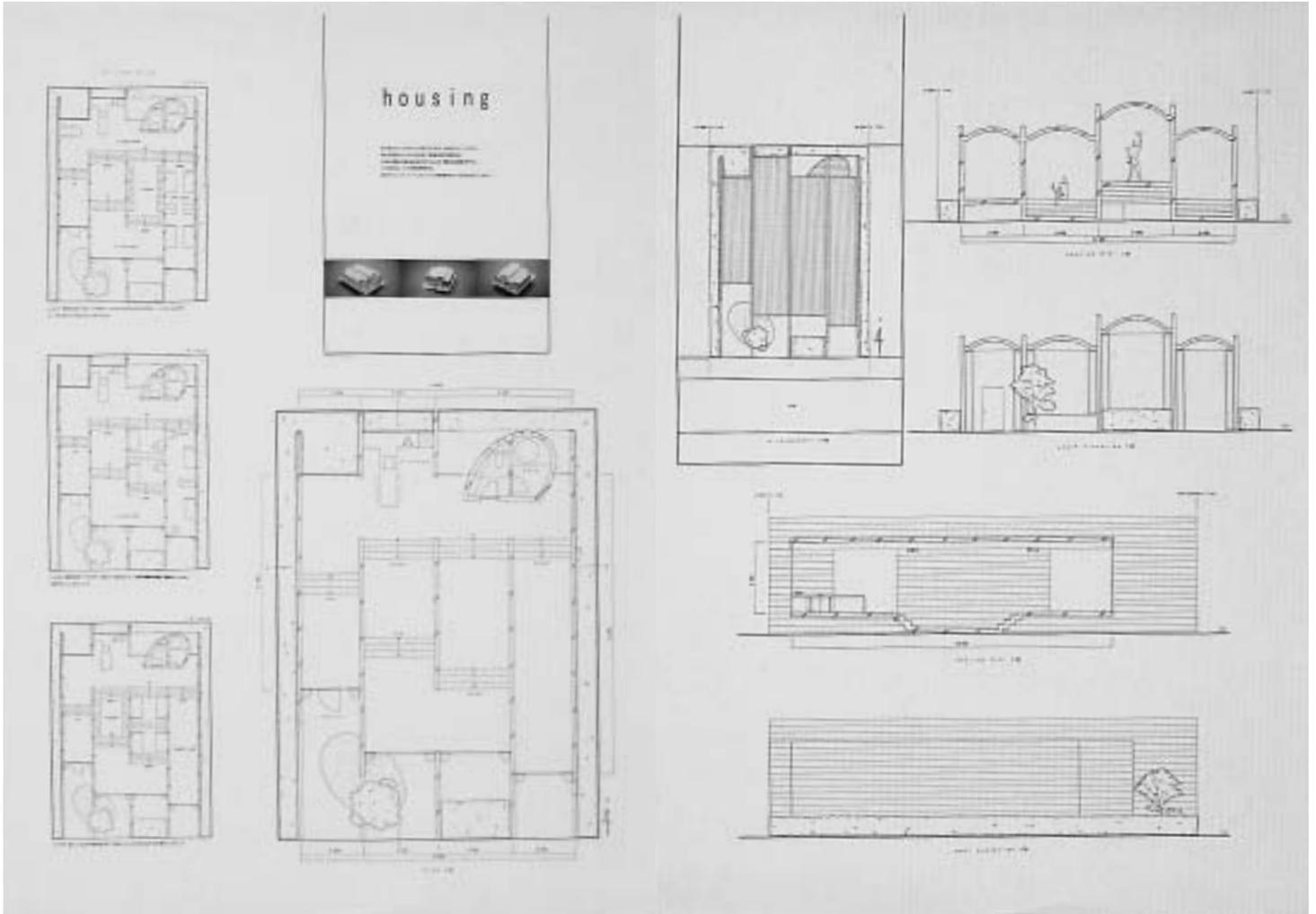


石井 美也子



建築設計製図 I

第1課題
住宅

2年1組

担当＝
野村 敏
若色 峰郎
小石川 正男
小松 清路
染谷 正弘
田島 夏樹
田中 雅美

けて1つ1つ空間に表情を持たせた。段差をつけることにより、ワンルームにはない1つ1つの空間の眺めの違いや、心理の変化を感じることができる。

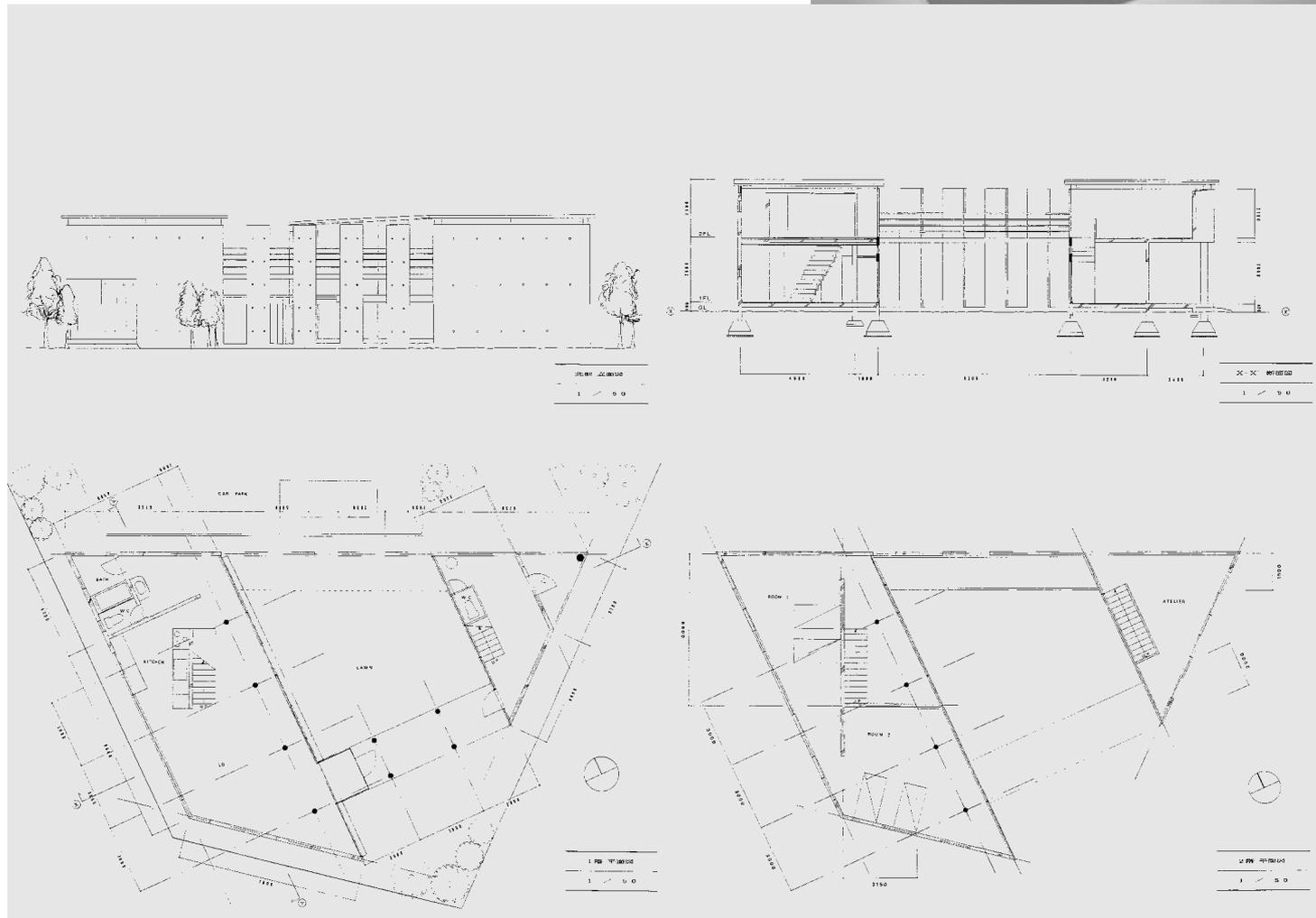
指導＝染谷 正弘

いつもあたりまえのように身近にあって、いつの間にか透明な存在となっているもの、しかしかけがえのないもの……たとえば愛する家族、思い出の品々……そうしたかけがえのないものをやさしく包み守る生活の器が「住まい」です。今、あたりまえすぎる程あたりまえとなったこの「住まい」の観念こそが、実は「近代住居」を支える基本理念でした。そしてその実現過

石井 美也子

絶えず変化するライフスタイルでは、1つの型にはまった家ではその変化に追いつくことができない。時間と共に変化するライフスタイルに合わせて様々な使い方ができる家を考えて。その場合、家具などにより様々な使い方ができるワンルームでは、空間そのものの表情に欠けている。この点を補うために、段差をつ

高木 幸



程がまさに「住まい」の近代化に他なりません。いま私たちは「近代住居」空間の真っ只中に日々暮らしているといえます。住宅設計という課題を通し、透明な存在となった「近代住居」の基本理念や間取り構造を浮き彫りにし、それを基本としながら自らが思い描く「住まい」を構想して欲しいと僕は考えました。立地、環境、敷地形状等の与条件をどう読むか、そして住まい手のライフスタイルをどう設定するか、「住まい」の構想はそこからスタートします。特に、今という時代をどう読むかが大切です。男と女、親と子といっ

た人と人との関係を規定する社会システムの構造変換は確実に進み、インターネット等が象徴する情報革命によってこれまでの時間・空間概念を変えてしまう新たな生活シーンが誕生しつつあります。石井さんの作品は、そうした住宅設計の課題にみごとに答えてくれています。彼女のコメントに、そして無駄な表現のないドローイングにもそれは表されています。彼女によって構成された「住まい」は、「近代住居」を越える可能性を秘めた生活の器へと具現化され、さらに「建築」空間へと昇華されています。

高木 幸

この住宅はデザイナーが住むと想定して、life spaceとjob spaceを離れた設計としてある。全体の形は周りを壁で閉じて囲んである。しかしすべてを閉ざすと暗い感じになるので中央に中庭を設け、そこに面した壁は全てガラス張りにすることで内部空間の暗さをなくしてある。そうすることで外の空間と一体となるも考えたからである。また内部の壁も閉じようとはせず解放させている。私が表したかったことは『閉ざされた中での開放』である。

指導＝田中 雅美

住宅を設計する際、どんな設計

者や建て主でも家族構成から必要な部屋数や、その間取りといった必要条件の他に、その人のライフスタイルや感性にあった理想郷を住空間に求めるものだ。高木案では、それが本人がいう「閉ざされた中での開放」という言葉や、中庭に対して開放的に広がる空間構成に結実している。建物は敷地形状に沿って、ほぼいっばいに建てられており、大きな中庭が中央に位置している。この中庭によって建物全体は、この建物の主人であるデザイナーの仕事場と住宅部分が二分されている。住宅の内部空間は中庭に大きく開放されており、明るく広がりを感じさせる。

建物の形態は変形した4角形の敷地形状に合わせているため、平面計画では三角コーナーを生み、少々使い勝手に制約をあたえそうである。しかし基本となる空間を一続きの大空間とすることによって、デッドスペースの窮屈さは軽減されている。この空間は、階段と一枚の長い壁によって空間が使い分けられるように配慮されている。北側道路側立面は、建物の外壁と中庭の境界をしるす独立した壁柱と2Fブリッジによって構成されている。この立面は建物全体の構成、特に中庭の閉鎖性と開放性を同時に表現しており、この住宅の対外社会に対する姿勢を決定している。